



図1.15 光学マップ計算例とその情報を利用したスカフールドニング例

(a)60塩基からなる仮想DNA配列。仮想制限酵素の認識部位 (TC) を下線、そして切断箇所を下向き矢印 (↓) で示す。(b)切断後の状態。最初の断片長が11塩基、2番目が7塩基のように、得られた断片の並びの情報は保持される。得られる数値ベクトルは(11, 7, 7, 10, 9, 4, 5, 7)であり、これが光学マップ情報に相当する。(c)光学マップ情報をもとに再構築した制限酵素切断部位情報。(d)仮想コンティグと対応する光学マップ。これは(a)から抜き出して得た部分配列から構成されており、横軸上の位置が一致している。(e)光学マップ情報同士のアラインメントとスカフールドニング結果。